

カラマツパルプ材の現状について

合田 好廣・牧瀬 明弘

1. は じ め に

1993年10月頃より北海道における新聞では、不況、円高による木材需要の低迷がたびたび掲載されている。なかでもカラマツチップ材需要が激減し、道東地方においても2〜3割の生産調整を行っており、一部の間伐材チップ専門工場は5月以降製造停止の状態が続いていると報じられている。また加工されないまま間伐材が工場敷地に放置されており、このような状態が続けば適期に間伐ができず、造林事業に大きな影響がでてくるものと思われる。そこでカラマツパルプ材の現状がどうなっているのか、もう少し詳しく調べてみたい。

2. カラマツ造林地の現状

北海道演習林標茶区の面積は1,446.8haで、そのうち約1,000haは天然林であり、カラマツ、トドマツを主体とする人工林はおおよそ400haで、そのうちカラマツ林は1/2の200haである。1955年ころより伐採跡地にカラマツの本格的な造林が行われ、年間20haにもおよぶ造林をした時期もあった。樹齢別造林地面積は図-1に示すとおり、10〜30年生の林分が大半をしめ、徐伐、間伐

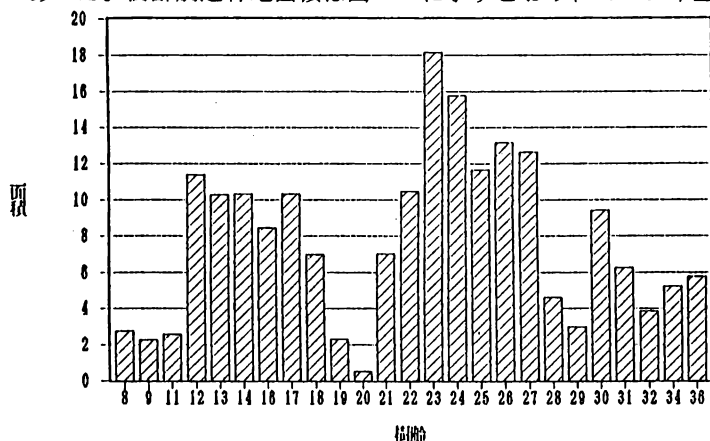


図-1 カラマツ樹齢別造林地面積

の時期に入っている。すでにその時期を逸している林分もある。カラマツは寒冷地における有用樹種として道東地方をはじめ多くの場所で植栽され、40年生程度の伐期を想定し今日に至っている。しかし、市場価格の低迷下でのカラマツの需要動向をふまえ、標茶パイロット・フォレスト営林事務所では伐期齢の70〜80年への延長とともに、間伐施業のあり方について検討している。

北海道演習林においても1993年、保育適期にある林分の間伐を実施すべく約9ha、4,000本余りを計画したが、いろいろ努力したにもかかわらず不実行に終わっている。今後このような状態が続けば有用材の生産はおろか、風害、雪害に弱くなり下草も生育せずやがて表土も流失し、森林としての価値がなくなっていくであろう。

3. パルプ材価格の市況推移

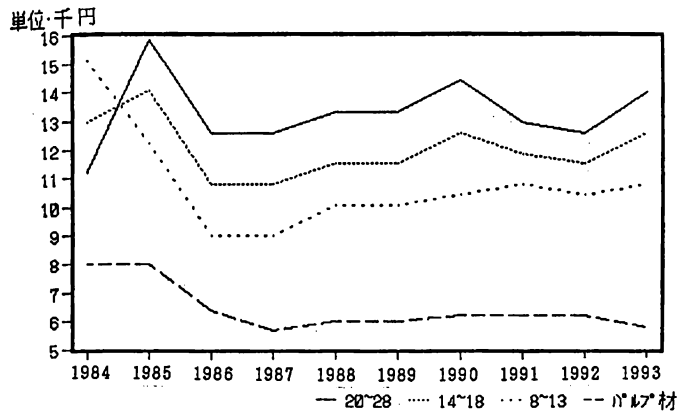


図-2 カラマツ素材価格（北見）

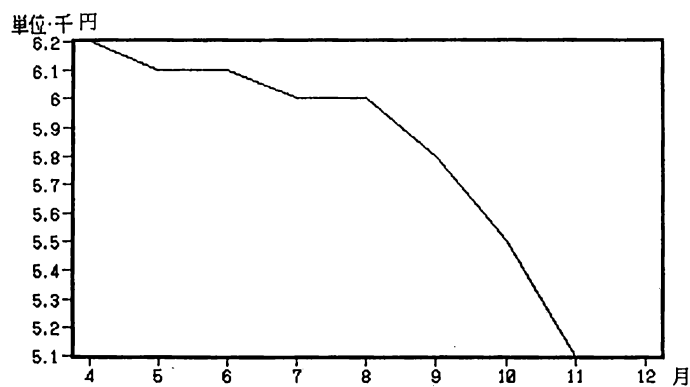


図-3 カラマツパルプ材価格（北見 1993年）

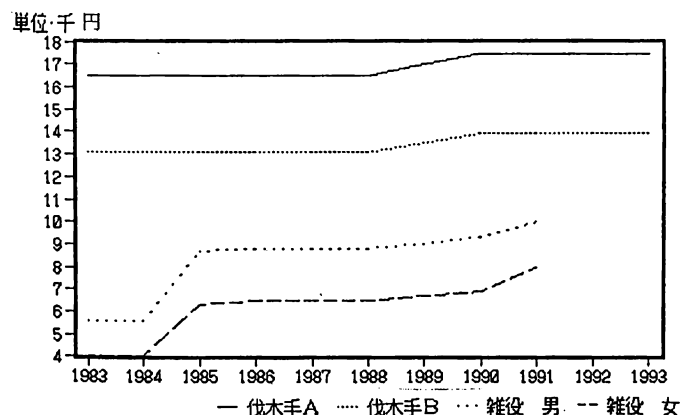


図-4 山林労務者職種別賃金

カラマツパルプ材価格は1980年頃までは、ほとんど価格差のない状態が続いていた。しかし図-2でみてもわかるように1986-87年にかけて2000円/m³以上の下落がみられた。これは急激な円高の影響ではないかと思われる。その後6,000円台に落ち着いたのは、民間企業が必死に円高に対応したのとバブル経済の発生によって何とか持ちこたえたものである。しかし、1990年頃より経済不況に入り、とくに図-3にみるように1993年には4月6,200円から12月には5,100円と急落している。一方図-4に示す伐木造材手日額賃金をみれば、1984年から93年に至るまでわずか1,000円の値上がりしかしていない。ほとんど変化しないといってもよいと思われる。

ここ数年パルプ材工場着価格は6,000円/m³前後とあまり替わりがないようであったが、1993年9月頃より下降気味である。また伐木造材は山元の傾斜度、集材距離等の条件は異なるが、立米当たり4,500-6,000円程であり、何とか採算ベースに乗っていたものの、最近ではこれが逆転している。このような状況がいつまで続くかわからないが、最新の情報では帯広地方において4,800円/m³というところまで低迷しているとのことである。

4. 現在の関連業界の動向

1993年からの急激な円高は紙パルプ業界および林業関係に大きな影響を及ぼしている。北海道におけるパルプ材の需要量は、堅調な紙需要に支えられて年々伸びていたが、景気後退による紙需要の低迷などにより、1990年を境に1992年度では15%の減少となっている。さらに最近の急激な円高の進行によって、輸入パルプ材の割合が増加し1992年度では総需要量の53%にもなっている。またパルプ材の出荷停滞のため前年と比べれば2.9倍の在庫があり、道産パルプ材の需要は一層厳しい状況にある。

現状では新聞紙とクラフト紙の需要がかなり落ち、紙製品は30%ぐらい需要減になっている。製紙工場の過去の投資のために今は過剰生産になっているという。また、パルプ会社の操業は70%の状態が続いている。今後については円高が進行している現状から、紙パルプ産業が輸入原料への依存度をますます高めていくことが予想され、また、古紙利用率も1988年の30%から1992年の35%へと上昇傾向にあることなどから、さらに道産パルプ材の需要減が懸念される状況にあると考えられるであろう。また、標茶町においても1994年3月よりチップ工場が閉鎖されることが決まっている。

一方道内各地に植林された民有林のカラマツは、いま1, 2回目の間伐期を迎えているが、パルプ会社は原木搬入を厳しく制限しているため、チップ需要が回復する兆しがみえない。森林所有者が積極的に森林施業に取り組める林業に転換をはかるため。①通常20-25%の間伐率を10-15%と低くする。②間伐材の農業用資材、公共土木工事などの利用拡大をはかる。③高性能林業機械を導入して生産コストの低減をはかるなどの努力している。しかし、軽油税の値上げ、過積み問題からトラック運賃の値上りもみこまれ、生産コストを引き上げる要因となっており、さらに問題が深刻化している。

5. お わ り に

以上述べてきたとおりかなり厳しい現状である。しかし200haにもおよぶカラマツ人工林を放置することはできず、少しずつでも手を入れなければならない。間伐立木売払いは当然不可能なことであり、第1回の間伐についてはむしろ保育関連事業として考えなければならないと思われる。直径10cm上程度の丸太が採材できるような林分であれば、造材請負または小面積であれば直営生産というのも考えられる。しかし、パルプ材を生産することは現在のところ困難であるため、歩止まりは極めて悪くなるが、直材より8-13cmの抗木、14-18cmの柱材、20-28cmの梱包材を生産する。事業費および日数を要するかも知れないが、市場動向を伺いながら施業を進めていかなければならないと思われる。

参 考 資 料

1. 北海道林材新聞 1993年11-12月
2. 北海道林務部林産振興課 木材市況調査月報
3. 標茶町役場 山林労務者職種別日額賃金